

「魂のたいまつ」を受け継ぐ

大阪自由大学の思い

「6年間、病院で寝たきりだった父が亡くなった」。春先、大学時代の級友、Hが知らせてきた。

Hの父は、この春亡くなった思想家、吉本隆明と同じ大正13年生まれの典型的な戦中派。6年前の春一番が吹いた日、散歩中に風にあおられて転倒し、脳挫傷でそのまま危篤状態が続いた。その後、持ち直し、Hはしみじみといていた。

「あの生命力の強さは、戦中派独特のものだ。若い頃は粗食続きで、その分、体が、特に内臓が丈夫になっているのではないかな。それに独特の気力というか、敢闘精神みたいなのがどっかにあるんだ」

最初の1年は毎週土曜、そして2年目からは2週に1回、病院に通った。そこで父親の手足の爪切り(爪

切りは2週に1回がちょうどいいペースだそうだと、司馬遼太郎の講演録の朗読を続けたという。

「朗読は最初の1年、オヤジもそれなりに聞いていたような気がするが、2年目からは全くオレの勝手で読み続けた。5巻を1年に1冊のペースで読み、第5巻から遡り、1昨年第1巻に辿りつき、今年第3巻を読んでいた。講演集はかなり話し言葉が多いので、読みやすいし、たぶん、聞きやすいはずだ」

Hは付け加えている。「読んでみて、やはり司馬遼太郎って凄い人だ。何回読んでも、また読めるんだよな。音読に耐えられるんだ」。

村上春樹の小説「1Q84」にも、主人公が死ぬ直前の自分の父親に、全く聞いているとは思えないの

に、日課のように本を読むシーンがある。「あれはたぶん自分の実体験なんだろう。情況がオレとまったく同じなんだよな。おそらく、この朗読がなければ、オレの病院通いは続かなかったように思う」。

そんな便りを読みながら、彼の結婚式の席で、当時、日本銀行に勤めていたオヤジさんが「これからは息子の時代だ。みなさん、よろしく」とあいさつした光景を思い出した。あのとき、私も「これからはオレたちが時代に責任をもたなくてはならない」と、時代のバトンを受け取る覚悟を強く意識させられた。

あれから30数年。いま、私は若い世代にどのようなバトンを渡そうとしているのか。そう思ったとき、浮かんだのはなぜか、司馬遼太郎の「洪庵のたいまつ」という一編だ。

司馬の作品には、膨大な博識から紡ぎだされた物語のおもしろさのほか、「語り口」に独特の魅力がある。それは上方芸能の「語り」の文化の伝統をにじませている。

「世のために尽くした人の一生ほど、美しいものはない。ここでは、特に美しい生涯を送った人について

語りたい。緒方洪庵のことである。」
幕末、大阪で私塾「適塾」を開いた緒方洪庵の人生を淡々と語り、「振り返ってみると、洪庵の一生で、最も楽しかったのは、かれが塾生たちを教育していた時代だったろう」と司馬はいう。

「洪庵は、自分の恩師たちから引き継いだたいまつを、よりいっそう大きくした人であった。

かれの偉大さは、自分の火を、弟子たちの一人一人に移し続けたことである」

戦後の第一世代として経済成長を謳歌した私たち「団塊の世代」が高齢者に仲間入りしている。いま、私たちは次世代に何を伝えられるのか。そんな思いにかられて7月、市民による学びの場として「大阪自由大学」の活動を始めた。初代学長に、「語り」の世界に造詣の深い「上方芸能」発行人、木津川計さんをお迎えできた。その指導を仰ぎながら、私なりに「魂のたいまつ」を受け継ぎたいと思っている。

大阪自由大学は <http://kansai-main.jp>

(大阪自由大学理事長・池田知隆)